ゐると云ふのは以つての外である。

又織大夫や源大夫や文字大夫が森下、武智氏から悪く云はれたからヒイキに對し申し譯ないと文樂座で大會をある事をなさん爲の雜誌屋におだてられて催したとかしないとか聞くが、若し眞なりとすれば悪いと云はれたのは必ず悪い所がある。それが悪くないのならば書かれた同じ雜誌に悪くない點を堂々と書くべきで、若しその雜誌が載せない場合は他の雜誌へ載せるとかすればよいのだが大會を開くなど云ふ兒戯に到つては餘りに馬鹿々々しくて物が云へないが或は若し彼等が本氣で云ふのならば己が無智を世上に示すこと以外の何物でもないと私は確く信ずる。氣の毒な大夫であるとまれ批評家の書いたものを悪口ととつたり、甚だしいのはその雜誌が來たら見ないで商賣用の菓子袋や茶袋にするといふ事を一つの自慢に公衆の前で述べる菓子屋や茶屋のおぢさんに到つてはそれこそこちらは敵はない、そんな連中にはどうかして子供と同じでなだめて我等の書くものを讀ませる必要がある。

森下氏はじめ吾々は悪いところは悪いと云ふ自信を以てゐるので、それを覆す爲には千萬人押し寄せると云へども吾は往かんの氣慨がある。まして不買同盟そんなことにはちつとも驚くものではない。森下氏の追悼には尙一層同氏の遺志を押し立てゝ進みたいと思ふ以上を以つて追悼の言葉に代へる

夢の如く逝つた同人森下蟻洞氏

樋口吾笑

大阪素義の名人高木蟻洞氏と先代樋口吾笑は淨瑠璃藝術の上に於ける親密な交際であつた。不肖吾笑は先代蟻洞氏の令息森下蟻洞氏と三十年來管鮑の契を結んで居ました。森下氏が時事新報の藝壇を預つて居る時代から、堀江、北陽、新町南の義大夫藝妓、文樂、近松の兩座より大阪素義各大會に至る迄、批評に關する交渉は頻繁を加へ眞聲會、南和會、鷺城會、宇部會等の審査員となり（姫路と宇部は伊東柳平氏と共同責任）講評錄發行の端緒を拓きたり、是れより先き著音機會社を起し自ら内外第一線に立ち躍進に躍進を重ね、本邦屈指の大會社となり成功を告げたるも、其の剛直なる性質と覇氣滿々たる經營振りは遂に重役連と意見の疎隔を來し出て邦樂同好會を組織し其の清廉潔白なる性質は自然の天惠ありて

順調に成育發達したるも純情寡慾にして最後の大成を計畫せる雄志と目前の小利益に握捉連と意見を異にし自ら去つて更に又日本錄音會社を起し獻身的盡瘁し漸く緒に付きしが日支事變の影響にて物資缺乏の上に離間中傷の策謀行はれ三年間の犧牲を放棄して去り二三の重役を殘し第一線を退き全く閑散の身となれり、是に於て平素斯道に深き趣味を有する處より豫ての口約に基き本誌の後援が實現するに至り。則ち第一着手として同人を勸請したるに學者、實業家にして斯道に深き趣味を有し其の回興を願ふ志を有する熱愛家は直に快諾せられ、誌面の改良は何より前にといふので斷乎として藝術本位を嚴守し斯道の廓清と發展に貢獻したるに大阪は固より東京その他各方面より非常に愛好され、同人諸君は嬉しく喜び中にも森下氏は益々勇氣を鼓舞し、中野、鴻池、武智の諸氏を始め少壯文學者の鋭敏なる藝術觀察力と其の勇健巧妙なる筆陣に感服し恐らく日本一の淨瑠璃機關誌なるべし、將來いよ〳〵戮力邁進し吾々先代が苦心したる機關誌の任務遂行に努むべく、或る事業と昭和文化の淨瑠璃を遺すべく計畫し前記諸氏その他同人諸君の諒諾を得て着手實行に移るべく同人林秀雄氏を勞する事あつて訪問したるは六月廿四日なりき。話は武智、大西氏の事より段々面白く進み茗料亭にて晩餐を共にし九時頃別れを告げ相携へて歸社し暫く閑談後頗る好機嫌に粉濱の邸に歸つたのである。

翌日愚老は昨夜の勞を謝する爲め訪問したるに少し發熱の氣分あり（三十七度一分）赤十字の熊谷博士が診て居る、病名はわからぬ——マア話しやうと引止められたけれども病氣に障つてはと靜養を勸め强いて退出した。その晩再び見舞ふたら三十八度……近所のお醫者さんも來て居るが病名がわからぬ……森下氏は話すれば氣がまぎれる……と頻りに話を挑まれたるも……無作法……無遠慮と……匆々歸社した。

其の翌廿六日朝見舞ふた時は三十七度一分……分泌物、血液等も試驗したが傳染病ではない、……依然病名不明、こんなたよりない醫者もないものぢや……と稍こぼして居た。長談は禁物と早速辭せんとしたるに……マア話しやうと勸められ二三分居たれど體に觸りてはと……とめるを聞かず歸つたがどうも安心して居れず、小澤博士を呼んだが矢張りわからぬ……東京の親戚、天王寺の親戚も見舞に來て居る、新京の令息へも電報した樣子、阪大の和田博士を呼んだのは廿九日頃と思ふ、合議診斷漸く腸炎ときまつた時は安否半々何とも云はれぬ模樣。此の時拙者は人生朝露の諺と醫師といふものの賴むに足らぬ事を深く强く感じ、早速東京の同人岡田蝶花形博士へ通知した。森下氏と岡田博士とは一面識もなき間柄なり、淨瑠璃の議論は決して皆同意見ではない。けれども研究發表といふ事が氣に入つて會談の機を待つて居た者である岡田博士は自信のある藥を送つて下さつたが其の時は既に腸

炎から腦炎に昂進し阪大に入院し脊髓から水をとらねばならぬといふ大手術で親族會議も萬一の僥倖をたのしみに入院せしめたが（七月五日）岡田博士の深切籠る妙藥も此の大手術も間に合はず。七月七日午後七時二十分「皆大きに世話であつた」と、一言を名殘りとし脆くも逝去した。七月三日新京から歸つた令息辰夫君は染々談話の暇もなく熱に浮かされ生死の街に彷徨せる父君蟻洞氏と夢幻に隻語を換したのみ、樋口に話したい事がある……來たら知らせよと焦れて居たさうなが遂に其の話したい事を聞く暇なく永遠の訣れとなつた。されど拙者は蟻洞氏逝きたりとは信ぜられず、今にいきて居る樣に思はれてならぬ。同八日朝本誌同人として一對の供花を持參し蟻洞氏の永遠の眠り顏を視て、拙者は泣いた……思へば死後を託した拙者が殘り託された蟻洞氏が先駈するとは何事かと寸前闇黑の世……蟻洞氏は年の順なら僕が殘る筈だが老少不定、どうも今年は危い六十一ぢや、正月の大患を征服したのが厄逃れであらうか……便りないとは折々聞く所であつたと色々往事を追懷し葬儀萬端の手傳ひが切めて萬分の一の報謝と信じ其の夜の十二時頃まで靈前に奉仕した。

翌九日は早朝より受付に居て葬式事務を司る、豊竹古靚大夫、竹本織大夫、鶴澤重造、伊東柳半、岡本井筒、同人黑田重平、鴻池幸武、武智鐵二、辻部閏三郎の諸氏會葬、告別式終つて一同阿倍野葬儀所へ送つた。翌十日は骨上げ、本誌弟三百九十號「引窓と橋本」の名批評が絶筆となつたので黄泉にある彌大夫、大隅、越路、關平、廣助の諸名人へ土産と入れて置いたに消へて跡形もなし以上名人の手に屆いたものであらう。一片の白骨を抱いて歸り靈前に安置禮拜し少時懷舊談を換はし散會した。

因に高木家、森下家は一向宗の離有屋で蟻洞氏は立派に安心立命は出來てある人であり又寫眞は玄人を凌ぐ技術家であつた。戒名釋法勝は無作法にも拙者の筆に染めたものである。

森下辰之助さんの思ひ出

本誌同人　鴻池幸武

私がはじめて森下さんにお目にかゝつたのは、昨年の十月四ツ橋文樂座で友人武智さんの紹介にてゞありました。偶然お目にかゝつたのではなく、淨瑠璃雜誌の内容を改善するに關して御相談に預る爲でした。そして、その時が翌月發行される淨瑠璃雜誌上に掲載される第一次文樂合評の材料を聽取すべき觀劇會でありました。ですから京都の太宰施門博士や